



学校だより

No.525

令和 3年 7月1日
練馬区立田柄第二小学校
校長 岩井 一 雄

教育目標 : 元気な子ども ・ 考える子ども ・ 思いやる子ども

初心忘るべからず

校長 岩井一雄

教員になった年に、壺井栄著「二十四の瞳」の舞台となった香川県小豆島の、岬の分教場跡を訪ねました。忙しい教員生活の中にあっても、常に子供に寄り添うこと、その初心を忘れまいと考えたからです。

朝、東京から新幹線、路線バス、フェリーを乗り継ぎ、小豆島でまた路線バスに乗り、田浦で下車すると、すでに日は傾きかけていました。周囲を見渡すと、近くに当時の姿そのままの分教場が保存されていました。

今は資料館になっている校舎の中に入ると、すり減った机やいす、そろばんなどが残り、そこに確かに子供たちと先生の生活があったことがわかりました。閉校式のために飾り付けられた輪飾りや、分教場へのお別れの言葉が書き綴られた黒板の文字も、何度もなぞられながら、大切に残されていました。

小説や映画の中に出てくる子供たちの声が聞こえてくるような錯覚にとらわれていると、地元の子供たちが集まってきました。「どこから来たの？」などと、屈託のない笑顔で声をかけられ、閉校後も子供たちの遊び場になっている校庭で高おにをしてお遊びしました。聞けば、先ほどまですぐ隣の浜辺で海水浴をしていたそう。

「今はバスに乗って本校に通っているけれど、分教場が続いていれば、ここに通うはずだったんだ・・・。」と話した子供の表情が印象に残りました。きっとこの分教場にかつて通った大人たちから、よい思い出を聞いていることが想像できました。

夜、近隣の民宿で夕涼みをしていると、先ほどの子供たちがやって来て「父ちゃんが家に来ないか、と言っている。」と声をかけに来ました。遠慮をしつつも、民宿のはす向かいの民家を訪ねると、子供たちのご両親が満面の笑みで迎えてくださいました。分教場の様子や思い出、今の岬の様子、だんだんと観光地化されていくことに対する期待や不安の入り混じった気持ちなどなど、たくさんのお話をうかがうことができました。

東京に帰って考えたことは、教師が子供たちに真剣に向き合ったことは、時がたち、たとえ学校が閉校になるようなことがあっても、人の心に生き続けるということです。当たり前のことかもしれませんが、校舎があり、校庭があり、そこに子供が登校しても、教師が子供としっかりと向き合い、喜びや悲しみを共有していかなければ、血も心も通いません。日々の慌ただしさの中で、また齢を重ねる中で、その情熱が下がってはいまいか、常に教師一人一人が自分の心に問い続けなければならないと考えます。「子供のためにはどのようにするのが一番いいか」教育の原点に立ち戻り、日々取り組んでいきます。

【お知らせ】

- パラリンピック観戦（8/27(金)6年 9/1(水)4年 9/2(木)5年）の有無については、情報があり次第、別途お知らせいたします。
- 延期された6年岩井移動教室は、10/11(月)～13(水)に実施予定です。
- 5年武石移動教室は、区で日程を再調整中です。（6年移動教室日程が変更になったため）

7月の生活目標「学校をきれいにしよう」

清掃活動を通して、子供たちには次の二つの力を身に付けてほしいと願っています。一つ目は、誰かに指示されて清掃をするのではなく、きれいにするために、自分は何をすればよいのかを考え、行動する力です。二つ目は、自分のためだけではなく、みんなのために働くことを喜びと感じられるような、みんなのために働ける力です。ご家庭でも、夏休みにこのような視点で掃除を見直し、話し合ってみていただけたら幸いです。